

2019年夏のパラダイス・ランチに至る

ヘレン・ヘインズ著

亡き父の遺品として出てきた1枚の日本兵（右）の写真。その1枚の写真がこれ程までのアドベンチャーに繋がるとは誰が想像したのでしょうか。アガペ・ワールドとの出会い、そして、それを機に一気に人脈が広がったのです。

7月の初め、ロンドン南西部のウィンプルドンで開かれたアガペ主催の「パラダイス・ランチ」という会に、私たちは生まれて初めて、招かれました。むろんお昼をご馳走になるのでしょうか。お宅に上がるには、靴を脱がねばならないことも知っていました。

でも、それが、どんな会なのか、また何を期待したら良いのか、全く見当が付きませんでした。

感想は、ワンダフル！私も娘のタリ（写真下、左端）も、素晴らしい午後のひと時を過ごしました。

そこで私たちは、実に沢山の興味深い方々や親切な方々に、とても暖かく迎えられました。「(日英二国間の) 友好と和解」がその理念である、アガペの活動に携わる人たちです。



私の父、故アーネスト・ビクター・ヘインズ（写真右、当時）

はシンガポール陥落後に日本軍の捕虜となりましたが、同じような経験を持つ方や、ご家族の話聞くのはとても刺激になりました。

極東捕虜となった者の多くがそうであったように、私の父も、チャンギでの捕虜時代の経験を語ることは殆どありませんでした。

ところが、パラダイス・ランチで私は途端に、同じような歴史の体験者の輪の中にはありませんか。最後の座談会では、本当に沢山のことを学びました。

私自身もアガペとのアドベンチャーの始まりが、2004年に父が死去した時に遡ることを話しました。冒頭の写真を父の遺品の中に見つけた時のことです。



写真には「トベ」とだけ記されていました。母は、この「トベ」という日本兵が捕虜時代の父を助けてくれたとおぼろげながら記憶していました。

母が逝去した2017年、もう1つの発見がありました。この日本兵のもう1枚の写真と「Y.トベより、ヘインズへ」と記された紙片です。

父は、この写真を60年以上に渡って、大切に保存していたのです。父の生涯にとって如何に重要なことだったかを思わずにはいられません。この日本兵がいなければ、私や兄、そして私たちの家族その



ものが存在しなかったのかもしれない。

この日本兵トベさんのご家族が今もいらっしゃることを、恵子は探し当ててくれました。私たちはアガペ主催の癒しと和解の旅で来年秋に日本を訪ねますが、トベ氏家族との対面が叶うよう、心から願っています。実現したら、この上なく光栄なこととなるでしょう。

アガペ・ワールドには感謝の言葉がありません。暖かい歓迎、深い友情、おもてなしの心に、パラダイスランチで振る舞われた美味しい手料理の数々...

もう来年が待ち遠しくて仕方ありません。



ヘレンさんは、2020年秋の「アガペ心の癒しと和解の旅」で訪日する予定でした。今も訪日して、戸部さんのお遺族とお会いしたいとの想いをお持ちです。

英語で書かれたヘレンさんのオリジナルの寄稿文は、英語版ニュースレター Autumn 2019でお読み頂けます。

